

『人を汚すもの』

'21/02/28

聖書箇所: マルコの福音書 7章 14-23節 (新約 p.79)

皆さんは、「エンガチョ」というような風習…、あるいは、「おまじない」のようなことをご存知でしょうか？ 映画「千と千尋の神隠し」でも、こういったシーンが出てきますけれども、…私が調べたところによりますと、こういったものは、何か汚れたものに、私たちが触れた時に、「そういった汚れから自分を守りたい…」というような思いから波及していったものらしいです。

しかし、私たちは…、特に、私の子ども時代などは…、誰か人を差別して、「わー！ あいつに触ったら汚れるー！ あいつに近づいたり、しゃべったりしたら汚れるー！」などと言って、からかったりする、というようなことがありました(正直、私はあまりしませんでした)。今にして思えば、随分と心無いことをしたものだと思いますが…、しかし、そうやって、他人を嫌ったり、差別したり、あるいは、人を見下したりしてしまうような行為は、私たち人間が皆、多かれ少なかれ、経験していることではないでしょうか？

命題: 私たち人間を汚すものとは、一体、どのようなものなのでしょう？

今日、私たちは、そういったような…、すべての人間が抱えてしまっている罪の本質？とも言うべきものについて、イエス・キリストが話してくださった内容について、一緒に考えていきたいと思います。イエス様が教えてくださり…、また、今日、私たちが学んでいきたい内容は、私たち人間を汚してしまうものとは、一体、どのようなものか？というテーマです。

先週の礼拝で学んだように、今から 2000 年前のユダヤ人たちは、「異邦人(つまり、自分たちユダヤ人以外の者たち)は皆、汚れている！」と、本気で考えておりました。だから、彼らは、異邦人たちを嫌い…、食事する前に、手洗いを念入りにしたし…、特に、市場から帰った時などに、その身を清めたりしたのです。しかし、それらは皆、私たちの罪に対して…、つまり、霊的な汚れに関しては、全くと言って良いほど、意味がありませんでした…。だから、イエス様は、今日のようなみことばを語ってくださったのです！

今日、私たちは今一度、私たち人間を汚してしまう…、悪しき存在について学んでいくことによって、私たちが一体、どういったことに気を付けて…、そして、今、何をすべきなのか？ということについて考えていきたいと思います。願わくは、今日このメッセージを聞いてくださった皆さんが、私たち人間が抱えている罪の問題について、しっかりと知ることができ、そして、その問題を正しく解決することができますよう、願います。どうぞ、聖書をお持ちでしたら、今日のみことばである、マルコ 7:14-23 をお開きくださいますか？…そこには、このように記されてあります。

- 14 イエスは再び群衆を呼び寄せて言われた。「みな、わたしの言うことを聞いて、悟るようになりなさい。
- 15 外側から人に入って、人を汚すことのできる物は何もありません。人から出て来るものが、人を汚すものなのです。」
- 17 イエスが群衆を離れて、家に入られると、弟子たちは、このたとえについて尋ねた。
- 18 イエスは言われた。「あなたがたまで、そんなにわからないのですか。外側から人に入って来る物は人を汚すことができない、ということがわからないのですか。
- 19 そのような物は、人の心には、入らないで、腹に入り、そして、かわやに出されてしまうのです。」イエスは、このように、すべての食物をきよいとされた。
- 20 また言われた。「人から出るもの、これが、人を汚すのです。
- 21 内側から、すなわち、人の心から出て来るものは、悪い考え、不品行、盗み、殺人、
- 22 姦淫、貪欲、よこしま、欺き、好色、ねたみ、そり、高ぶり、愚かさであり、
- 23 これらの悪はみな、内側から出て、人を汚すのです。」

I・外側にあるものは、私たちのことを汚すことができない！

今読んだみことばから、イエス様が教えてくださったことは、私たちの“外側”にあるものは、私たちのことを汚すことができない！ということです。…実は、こういったことが、当時のユダヤ人たち…、特に、当時の宗教家であったパリサイ人たちは、よく分かっていなかったのです。

●イエス様が命じられた内容

どうぞ、まずは、今読んだ最初の 14 節に注目してみてください。…この少し前、マルコ伝 6 章で、イエス様は、2回ほど、当時そこに集まっていた群衆たちと、意識的に、「距離を取ろうと」しておられます。そういったことは、マルコ伝 6 章だけを見ると分かりにくいかも知れませんが、並行記事であるマタイ伝 14 章などを見ると分かります。具体的には、「5000 人の給食」の前と、「湖の上を歩かれる」少し前になります。…でも、せっかく、イエス様の周りに、大勢の人が集まって来ていたのに、どうして、イエス様は、ある時に、群衆たちのことを解散させたのでしょうか？ 皆さんは分かっていますか？

⇒それは、当時、多くの者たちの関心が、イエス様の語ってくださるメッセージではなくて…、病人たちの癒しや不思議な奇蹟にばかり向いてしまっていたからです。…癒しや奇蹟を行なうために、イエス様は、この地上へ下ってきてくださったのではありません！ イエス様は、私たちに、真の神様の話や救いの話をするために、私たちのもとへ下ってきてくださったのです！ …そうでしょ！ だから、イエス様は、例えば、ルカ 9:11 では、群衆たちのことを喜んで迎えて、彼らに神の国の話などをしてくださったのです！

どうぞ、今日のみことばの少し前、マルコ 6:34 をご覧ください。そこには、こうありました、『イエスは、舟から上がられると、多くの群衆をご覧になった。そして彼らが羊飼いのいない羊のようであるのを深くあわれみ、いろいろと教え始められた。』って…。3週間前、このみことばを学びました。イエス様は、当時、多くの者たちを見て、「彼らが、羊飼いのいない羊のようであった」ので、かわいそうに思われたのです…。私たち人間には皆、私たちの世話を…、私たちが歩むべき正しい道へ導いてくださる、羊飼いのような存在が必要なのです(詩篇 23:3)！ そのような存在が居ないから、私たちは、その都度その都度で、自分勝手な好きな道へ行ってしまう…、ある時に、躓いたり、道を踏み外したり、大きな罪に陥ったりして、どん底にまで落ちて行ってしまうのです…。

しかし、今日のみことばの 14 節…、この時、イエス様は、一旦解散された群衆たちを呼び集められました。だから、今日のみことばには、『再び…』とあるわけです。そこで、イエス様は、こうおっしゃいます、『みな、わたしの言うことを聞いて、悟るようになりなさい。』って…。実は、ここ 14 節で『言われた』と訳されてある言葉(λέγω)は、「言う、告げる…」といったような、「誰かが何かを発言する時に使われるような言葉」なのですが、文脈によっては、『言いつける、命じる…』とも訳されるような言葉です。実際、そのすぐ後、ここ 14 節では、「聞く」という言葉と、「悟る」という言葉が、(アオリスト)命令形で記されてあります。つまり、イエス様は、ここで、群衆に対して、「聞きなさい！ 悟りなさい！」と命じられたのです。

ここで、「悟る」と訳されてあるギリシャ語の言葉(συνίημι)は、「一緒に」という言葉と、「送る」という言葉とが合わさった合成語です。「一緒に＋送る」、そういったような組み合わせから、この言葉は、一緒に総合する？まとめる？というニュアンスで、「(深く)理解する、悟る、気づく、了解する…」というような意味で使われています。

つまり、ここで、イエス様が群衆に命じておられるのは、「わたしの言うことを、よく聞いて、しっかりと理解しなさい！ 悟りなさい！」ということです。…そういったことをイエス様は群衆たちに願っておられたのです。

…でも、そういったことは、今も変わっていません。今の時代も、私たちに必要なことは、しっかりとイエス様が語ってくださるみことばに耳を傾けて、悟ることではないでしょうか？…ここ日本では、「悟り」と言うと、仏教的なことをイメージしたり…、自分の中で、勝手に判断して、「これこそが真理だ！」と言い切ってしまうがちですが、でも、聖書のみことばは、こう教えます、「真理は私たち人間の内には無い！」って…。もしも、私たちが真理について知りたいのなら…、様々な事柄の、永遠に変わる事の無い意味や理由、あるいは、様々な目的について知りたいのなら、私たちは、造り主なる神様の御声である、この聖書に耳を傾けるべきです！…と言いますのは、すべてを造られた神様こそが真理だからです！その神様が私たちに与えてくださった聖書こそが真理です！それ以外に真理はありません…。だから、私たちは、聖書を学ぶのです…。

●外側から入って、人を汚す ことのできる物はない！

どうぞ、今度は、今日のみことばの 15 節に注目してください。ここで、イエス様は、今日のみことばの結論とも言い得ることを教えてください。それが、『外側から人に入って、人を汚すことのできる物は何もありません。人から出て来るものが、人を汚すものなのです。』ということ。しかし、これは、当時のパリサイ人たちが律法学者たちからすれば、驚くべき内容でありました。…と言いますのは、先程も話したように、当時のパリサイ人たちは、「異邦人たちは汚れている。彼らが触れたものに、私たちが触れると、私たちも汚れてしまう…」と考えていたからです。…だから、彼らは「手洗い」にこだわったのです。

17 節、その後、イエス様の一行は、群衆を離れて、ある家に入ります。そこで、弟子たちは、ようやく、イエス様の話された例えについて尋ねます。18 節で、イエス様は、弟子たちの理解が遅いことを嘆いておられます。皆さん、覚えておられますでしょ？マルコ 6:52 にあったように、この時の弟子たちは、なかなか、イエス様が教えてくださったことを理解できずにいたのです。でも、そんな彼らにも良い部分がありました。…と言いますのは、彼らは、ちゃんと、イエス様の所へ行って、イエス様の話してくださった真意について、尋ねたからです。

皆さん、気づいてくださいました？…実は、今日のみことばを注意深くご覧くださいますと、15 節の後には、17 節になっています。16 節は、どこへ行ってしまったのでしょうか？実は、16 節は、欄外に記されており、そこをご覧くださいますと、「* 後代の写本に 16 節として、『聞く耳のある者は聞きなさい』を加える」とありますでしょ？

現代の多くの聖書学者による見解は、たくさんの写本を見比べた結果、ここ 16 節の部分は、オリジナルの…、つまり、マルコが書き記した原本には、ここ 16 節の部分は無かったであろうというのが、現代の結論です。しかし、数的には、多くの写本に、『聞く耳のある者は聞きなさい』という文言が含まれているそうです。…でも、分からないではありません。…と言いますのは、イエス様は、ここ以外の箇所でも、そういったことをおっしゃられて、私たちが関心をもって、様々なことを知るための“努力”をなささい！というようなことを教えてくださっているからです。そうじゃありません？

しかし、それに対して、当時の群衆たちはどうだったでしょう？…残念ながら、今日のみことばには、そういったようなことがはっきりとは記されてありません。…しかし、何となく、察することはできます。…恐らく、この当時の群衆たちは、イエス様に、そういった真意について尋ねようとはしないで、弟子たちだけが、勇気を持って、イエス様に尋ねたのです…。

長い間、牧師をやっていると、成長していくクリスチャンと、あまり成長していかないクリスチャンとの差が見えてきます。簡単に言うと、成長していくクリスチャンたちは、何か分からないことや難しいことがあると、すぐに尋ねてきてくださいます、「これは、どういう意味ですか？これは、こういう理解で良いですか？」って

…。そういった方は、皆さん…、私たちがメッセージをしても、集中して聞いてくださって、多くの方たちはノートを取っておられます。しかし、一方で、あまり成長していかないクリスチャンは、ノートを取らないだけでなく、難しいメッセージをしても、ほとんど質問されることもありません。難しいからと言って、すぐに諦めて、放っておかれるのでしょうか？…でも、弟子たちは、イエス様に質問しに行ったのです。…果たして、この時のイエス様は、面倒くさそうに、イヤイヤお答えになったのでしょうか？…いいえ、まず間違いなく、イエス様は、多少、厳しい口調であったかも知れませんが、熱心に弟子たちに教えてくださったはずですよ。

●すべての食べ物 きれい！

どうぞ、今度は、18-19 節をご覧ください。ここで、イエス様は、弟子たちに、もう一度、①私たちの外にあるものは、私たちのことを汚すことができない！ということと、②すべての食べ物は“きれい”！ということを教えてくださいました。

どうぞ、皆さん、できたら、19 節の前半に注目してみてください。ここで、イエス様は、何とおっしゃってくださっています？…19 節、『そのような物は、…』の後です！『…人の心には、入らないで、腹に入り、そして、かわや(つまり、トイレ)に出されてしまうのです。』とありますでしょ？

ねえ、皆さん…。私たち人間の本质って、どこにあるのでしょうか？「本質」とは、辞書¹を調べてみますと、こう説明されておりました、「物事の本来の性質や姿。それなしには、その物が存在し得ない性質・要素…」って…。じゃあ、私たちの本質は、どこにあります？…この体でしょうか？

⇒いいえ、聖書のみことばは、そうは教えません…。聖書のみことばは、「私たち人間の本質は、心にある」と教えるのです。だから、天の神様は、私たちの持ち物や容貌(=ルックス)ではなく、私たちの心を御覧になるわけですよ(I サムエル記 16:7)。また、イエス様は、**マタイ 6:21**で、『あなたの宝のあるところに、あなたの心もあるからです。』とおっしゃられました。心こそが、皆さんの本質なのです！…違います？

ここ 19 節で、イエス様は、「食べ物は、私たち人間の心には入らないで、お腹に入って、ただ、トイレに出ていだけだ…」という趣旨の話をされました。…だって、そうでしょ？いくら、私たちが、体に良い食べ物を食べたところで、それで、私たちの心が清くなっていくわけではありません。それと同様に、私たちが、多少、添加物や毒素を含んだ食べ物を食べたところで、それで、私たちの心が汚されるかと言うと、そうでもありません。毒素の影響を受けるのは、体の方であって、私たちの心ではありません。…ね！

どうか、皆さん。**創世記 2-3 章に記されてある、『善悪の知識の木』の実について考えてみてください。**

果たして、あの木の实には、私たちが食べてしまうと、罪に汚れてしまうような、「罪の源、罪の毒素」のようなものが含まれていたのでしょうか？…私は、そうは思いません。…と言いますのは、「すべての食べ物はきれい」わけでしょ？…もしも、あの木の中に、ほんの少しでも、罪が含まれていたのだとしたら、すべてを造られた神様が、罪の創始者になってしまいませんか？…私が考えますのは、あの善悪を知る実の中に、何か、悪いものが含まれていたのではなくて…、神様の命令に背くこと…、あるいは、神様のみこころに従わないことが“罪”なのです！…罪とは、そういったように、物質的なものではなく、私たちの心を蝕んで、私たちの心をダメにしていく…、霊的なものなのです。だから、罪は、私たちの霊的な部分であるたましいを犯し…、また、霊的な存在であるはずの御使いたちのことも汚し得たのです。…そうじゃありません？

興味深いもので、動物たちに罪はありません(罪の呪いを受けて、本来の姿とは変わっていますが)。…と言いますのも、動物たちは肉体があっても、霊的なたましいが無いからです。遺伝子的には、私たちが 99%似てはいても、そこが、私たち人間と、動物たちが大きく違う部分です。

¹ スーパー大辞林 3.0©三省堂 2006-2008

確かに、天の神様は、旧約の時代…、レビ記などのみことばを通して、きよい食べ物と、そうではない食べ物とを分けられました。それは、豚やらくだが汚れていて…、それらの動物たちの肉に、罪の性質が含まれているというのではなくて…、神様のみこころに背いて、そういった動物たちの肉を食べてしまうことが良くないこと…、つまり、罪なのです。…要は、先程話した、善悪の知識の実と一緒にです。

II・本当に、私たちのことを汚すもの＝様々な「罪」!

どうぞ、今からは、本当に、私たちのことを汚してしまうものである…、様々な“罪”について見ていきましょう。…この時、イエス様は、弟子たちに何と教えてくださったでしょう? どうぞ、今日のみことばの最後、20-23節を、もう1度、ご覧ください。

20 また言われた。「人から出るもの、これが、人を汚すのです。」

21 内側から、すなわち、人の心から出て来るものは、悪い考え、不品行、盗み、殺人、

22 姦淫、貪欲、よこしま、欺き、好色、ねたみ、そしり、高ぶり、愚かさであり、

23 これらの悪はみな、内側から出て、人を汚すのです。」

●様々な罪の種類

ここで、イエス様は、様々な罪の“種類”について教えてくださっています。…その前に、まとめとして、『人から出るもの、これが、人を汚すのです』ということをお話しています。具体的に言うと、私たちの心から出てくるものです。まずは、『悪い考え』とありますが、この表現を原語のギリシヤ語で観察してみると、「考え」という意味の言葉(διαλογισμός)と、「悪いもの」という言葉(κακός)それぞれに、ギリシヤ語の冠詞が付いています。つまりは、私たちの考えることが悪いから…、私たちが罪ある者として存在しているから、そういったものが、実際の行動や行ないとなって現われてくる、ということです。

そうして、実際に現われてくる罪の行動として、1番最初にイエス様が紹介されたものが、①『不品行』(πορνεία)であります。「不品行」という言葉を、日本語の辞典で調べてみると、「品行が悪いこと。また、身持ちの悪いこと…」というような感じで説明されておりました。しかし、聖書の翻訳では少し違います。実は、これは、「ポルノ」という言葉の語源とも関係のある言葉で、「不道徳な性的関係」を言います。神様が認めてくださる性的な関係は、神様から夫婦として認められた男女間だけのものです。その次は、②『盗み』であります。これは、自分に与えられていない物を不満に思って、強引に何かを自分の物としてしまう行為です。その次に、③『殺人』、これは、皆さんもご存知のように、他人のいのちを奪ってしまう行為です。また、これには、実際の殺人だけではなく、心の中で、誰かを殺してしまうことや、あるいは、「あんな奴、いなくなっしまえ!」と思うことも含まれると思われまます。また次の、④『姦淫』、この言葉は、辞書を調べてみると、「夫婦間の誠実を裏切って、他の異性と関係すること」と説明されておりました。先程の「不品行」は、「性的な罪全般」について言及されておられるのに対して、これは、主に、「夫婦間」に関する罪…、平たく言えば、「浮気」のことだろうと思われまます。

そうして、今度は、⑤『貪欲』、これは、欲深いことです。つまり、いくら有っても満足できないことです。⑥『よこしま』、これは、邪悪な行為…、悪徳行為を言います。⑦『欺き』、これは、人をだましたり…、悪意をもって人を迷わせたりする行為のことです。⑧『好色』、これは、破廉恥とか、性的な行為・欲望のことです。⑨『ねたみ』、これは、原語では「目」とか、「嫉妬」という意味の言葉で、他人のことをうらやむことです。⑩『そしり』、これは、他人の悪口などを言って、人を傷つけることです。⑪『高ぶり』、これは、自分のことを他人よりも優れていると、自分勝手に思い込むことです。⑫『愚かさ』、これは、分別が無いとか、道徳的&信仰的に正しいことが判断できないようなことです。

良いですか、皆さん? こういったような悪が、私たちのことを益々汚していくのです。様々な食べ物や動物たち…、あるいは、異邦人たちの体が汚れているのではありません! 私たちの心に巣食う「罪」こそが、1番の原因なのであり…、それこそが、私たちが絶対に解決しないといけない問題なのです!

どうか、皆さん、もしできましたら、1テモテ4章のみことばを開けてみてください…ここで、パウロは、後の時代に関して、こんな予言と警告を与えてくれています。『1 しかし、御霊が明らかに言われるように、後の時代になると、ある人たちは惑わす霊と悪霊の教えに心を奪われ、信仰から離れるようになります。2 それは、うそつきどもの偽善によるものです。彼らは良心が麻痺しており、3 結婚することを禁じたり、食物を断つことを命じたりします。しかし食物は、信仰があり、真理を知っている人が感謝して受けるようにと、神が造られた物です。4 神が造られた物はみな良い物で、感謝して受けるとき、捨てるべき物は何一つありません。』(1テモテ4:1-4)

⇒皆さん、聞いてくださいました?…ここでも、パウロは、神様が造られた物は皆、良い物であって、何一つ捨てるべき物はない、ということをお話しています。しかし、悲しいことに、今、私たちの周りには、聖職者は結婚すべきでないとか、断食をしたら良いとか、あまり、聖書的でない行為を教えるような傾向があります。まさに、今は、そういったような時代なのです。

それと、皆さん、気づいてくださいました?…実は、今読んだところの2節に、惑わす霊と悪霊の教えと心に奪われた者たちの『良心が麻痺しており…』というような表現がありましたでしょ? 多分、皆さんもご存知のように、私たちの心にある、善や悪を判断する良心というものは完全ではありません。その良心は間違っても多々あるし…、今日のみことばが教えてくれるように、「麻痺する」ことも有り得るのです。

だから、私たちクリスチャンは、1ヨハネ1章や黙示録2章のみことばが教えてくれるように、できるだけ早くに、自分の罪や過ちを見つけて、悔い改めることが必要なのです…。

●当時のパリサイ人たちがユダヤ人たちの 思い違い

皆さんは、マタイ3章に記されてある、こんなエピソードを覚えておられると思います。どうぞ、もし、できましたら、マタイ3:7-12を開けてみてください。『7 しかし、パリサイ人やサドカイ人が大ぜいバプテスマを受けに来るのを見たとき、ヨハネは彼らに言った。「まむしのすえたち。だれが必ず来る御怒りをのがれるように教えたのか。8 それなら、悔い改めにふさわしい実を結びなさい。9 『われわれの父はアブラハムだ』と心の中で言うような考えではいけない。あなたがたに言うておくれ、神は、この石ころからでも、アブラハムの子孫を起すことがおできになるのです。10 斧もすでに木の根元に置かれています。だから、良い実を結ばない木は、みな切り倒されて、火に投げ込まれます。11 私は、あなたがたが悔い改めるために、水のバプテスマを授けていますが、私のあとから来られる方は、私よりもさらに力のある方です。私はその方のはきものを脱がせてあげる値うちもありません。その方は、あなたがたに聖霊と火とのバプテスマをお授けになります。12 手に箕(み)を持っておられ、ご自分の脱穀場をすみずみまできよめられます。麦を倉に納め、穀を消えない火で焼き尽くされます。』』

⇒この平行記事は、マルコ伝1章にもあるので、私たちはもう既に学んだはずですが、この時、バプテスマのヨハネが、群衆たちに「悔い改めのバプテスマ」を施してしまっていて、ある時、そこに大勢のパリサイ人たちがやって来ました。しかし、彼らは、軽い気持ちで、ヨハネからバプテスマを受けようとしていたようです。そういったことを察して、ヨハネは、彼らのことを、こう叱るわけです、『まむしのすえたち。だれが必ず来る御怒りをのがれるように教えたのか。それなら、悔い改めにふさわしい実を結びなさい!』って…。

この当時、大勢のパリサイ人たちがユダヤ人たちは、「自分たちは、「あ」のアブラハムの子孫だ!」ということで、「自分たちは、神の国に入れる(=救われる)!」と勘違いしておりました。…しかし、そんなパリサイ人たちにヨハネは、こう諭します、「神は、こんな石ころからでも、アブラハムの子孫を起すことが御出来になる」って…。

私たちが救われるために必要なのは、正しい…、本物の悔い改めです！そうして、本物の悔い改めには、間違いなく、正しい行ないが伴います。だから、ヨハネは、『悔い改めにふさわしい実』を要求したのです。いえ、バプテスマのヨハネだけではありません。イエス様だって、パウロだって、ヨハネだって、ペテロだって、彼らは皆、本物の信仰には、正しい行ないが伴うということを教えてください！そうでしょ！…私たちが救われるのに、神は、私たちのどこを御覧になられるのか？…それは、心です！だって、私たちの心こそが、私たちの本質なわけでしょ？…だから、大切なのは、私たちの罪に汚れた心が、聖霊と火とのバプテスマによって清められているかどうかです。一体、誰が、そのようなことをしてくださるのか？…それこそが、イエス・キリストです。

<励ましの言葉>

イエス様は、天から下って来てくださった真の神様です。私たち人間にはできないことを、イエス様ならお出来になります。イエス様は、私たち人間の心を…、その問題をすべて、ご存知です。だから、イエス様は、あのザアカイが抱えていた問題と罪の問題とを解決することができたのです。いや、ザアカイだけではありません。例えば、ヨハネ 4 章に出てくるサマリヤの女…、あるいはまた、ヨハネ 9 章に出てくる、生まれつきの盲人だって、そうです。イエス様は彼らの問題をご存知で、彼らの問題を解決してくださいました。イエス様は、どんな者だって救うことがお出来になるからです。

来週、私たちは、この当時、異邦人として、ユダヤ人たちからすると忌み嫌われていたツロ…、つまり、カナン人の女が持っていた信仰に関するみことばを学んでいきます。例え、異邦人であろうと、信仰を持ってさえいれば、ユダヤ人と同様、救われるのだ！という話を、マルコは、今日学んだ、このエピソードの後で教えてください。

そのように、イエス様は、ありとあらゆる問題を…、また、すべての者を救うことがお出来になります…。良いですか、皆さん？もしも、皆さんが、どのような問題を抱えていようと…、あるいは、どのような罪を犯していようと、皆さんが心から悔い改めて、「本当に救われたい！」と願っておられるなら、イエス様は、あなたのことを救うことがお出来になります。

どうか、できるだけ、早くに…、あなたの良心が麻痺していく前に、あなたの罪を悔い改めて、このイエス様を信じて、このイエス様にしっかりと繋がってください！…そこにしか、本物の救いも、本当の平安も、安息も無いのです。最後に、お祈りをもって、今日のメッセージを終わらせていただきます。